

---

# 私生活レポート

十三

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私生活レポート

### 【Nコード】

N0154T

### 【作者名】

十三

### 【あらすじ】

部活でも何でもなく、友人たちが一つの場所に集まってただただ無駄話をする話です。

( 登場人物の名前はまだ決定ではない為、次の話が出るまでは(仮)です。 )

## 1話 敵（前書き）

初投稿です。

読んで頂いた方は感想やこうした方がいいんじゃない？ 等の意見、修正点などを指摘して頂ければ幸いです。こんなもん読めないと感じた方は速やかに戻るのクリックを推奨します。

## 1話 敵

この話は、とある事情により俺と周囲の友人たちの生活記録をダラダラと書き記したものです。  
現実世界と多少異なる点がある事を先に報告しておきます。

筆者：勇斗ユウトより

\*\*\*\*\*

とある高校の空き教室

終業のチャイムはとうの昔に鳴り終え、校内に残るのは部活動に励む生徒か教師くらいしかいなくなつた時間帯。

教卓の前に立つ制服姿の男子、桜真オウマは、モヤシのように細い腕を大きく動かしながら、黒板に白いチョークをツカツカと走らせると、ある文字を書いてからハツキリと言いつつ放つた。

「今日は僕の敵について話し合いをしたいと思う！」

桜真は、ミミズが這つたような汚い字で『敵』とだけ無駄にデカデカと書かれた黒板をバンつと叩く。

その発言を聞いていた俺（勇斗）を除く、雛ヒナ、葵アオイの二人はあまりの発言にポカーンと口を開けたまま固まっている。おそらく、「何をバカな事を言い出したんだ、こいつは」というような事を考えているのだろう。俺がそう考えているのだから間違いない。

少し待ってみたものの、二人は何も言わない。復活する兆しもない。このままでは話が進まないと感じた俺は仕方なくつつこむ事にした。

「はあ？ 桜真、お前何言ってたんだ」

「何言ってたんだ？ じゃない！ 今言っただろ。敵だよ、敵。僕には敵が必要なんだ」

「へー」

「やめる。そんなバカを見るような眼で僕を見るな」

無理な注文はやめてほしい。今の桜真の発言を聞いた人間の9割は同じ事を考えるはずだ。一部の人間は桜真を助長するかもしれないが。あえて誰とは言わない。ていうか、言いたくない。

「そういえばお前、そんな事より今日は早く帰らなくて良いのか？ 家事当番の日なんだろ？」

「いいの。今日はこの話の方が重要なんだから」

「まあいいけど、叶さんカナエに怒られても知らないぞ」

ちっ。これで話が終わればいいと思っただけだな。そんな甘くはないか。

ちなみに叶さんというのは桜真の一つ上で高校3年の姉だ。桜真が家事当番の日は基本的にここに居るのだが、今日は友人との用事で出かけているらしく来てない。

だから桜真はここに来ていたのだが、サボっている事がばれたら叶さんに殺されるんじゃないだろうか。まあ、本人が良いなら別にいいか。

そんな事を考えていると、沈黙状態から抜け出したらしい仲間の明るい声が響く。

「はいはい。そんな事よりさ、雛が今日見た夢の話をしようよ！」

声のした方を向くと、見た目、小学生にしか見えない少女がつぶらな瞳をキラキラと輝かせ必死にプルプルと手を挙げていた。これで俺と同じ学年なのだというから人生不思議だ。学校にいただけあって、学校指定の制服を着ているのだが、これがまたぶかぶかで袖から手も出ていないせいで、身体の小ささを際立てている。ボリユームのある茶ががった髪を頭の後ろで止め、リスの尻尾のような状態にしているので小動物を想像させ、保護心をそそらせる可愛ら

しさだ。

「いや、それはどうだろう」

思わず頭を　なでてしまいそうになるのを必死に我慢しながらそれだけ答える。一時のテンションに身を任せたとしてもその話題で盛り上がるのは少しばかり難易度が高い。　数分後にはリアクションに困って果てた俺の死体が転がっていることだろう。というか、復活したばかりでテンション高くないか、この子。

「じゃあ私と勇斗で将来の家族計画についてしつぱりと話し合おうといい。そしてその後、二人でしつぱりとその計画を進行・・・」

葵は怪しげにそう言つと、黒く澄んだ瞳で俺を真つすぐに見つめてきた。こいつも同じ学年。感情に乏しい奴で常に無表情だ。おかげで何を考えているのかわからない事が多い。今も何を考えているのか解らないが、何かハアハアと呼吸が荒いのが気にかかる。それを見て、俺はハアと溜息を漏らす。

すらつとした体形、知的な顔立ち、指通しの良さそうならさらとした黒髪ショートヘアと俺の好みのツボを的確についているというのにこの発言と性格はない・・・本当にない・・・。身の危険を感じるし、丁重にシカトさせてもらおう事にしよう。

二人は当てにならないようなので俺も適当に思いついた事を言うてみる。

「よし。じゃあ俺の徹底節約講座でも開くか」

「ちつがーう！　違うだろ。まず僕の話だろ！」

どうやら俺は、言葉の選択を間違えたらしい。桜真がキレた・・・。

痺れを切らした様子の桜真は、肩をワナワナと震わせていた。どうやらこれ以上ボケても無駄なようだ。俺も真面目に言い返す。

「今日はマジでそんな下らない話をするつもりなのか？」

見回すと、同じ気持ちでいた雛と葵の二人は、うんうんと頷いている。せつかくバカな事を言って話をそらそうと思っていたのに、これだから桜真は・・・。

雖なんて慣れもしない事をしたせいでかなり苦しませた事や言っていたじゃないか。あの子、子供らしい外見に似合わず本当は凄くまじめな子なのに。残念な事に葵については冗談のつもりではないらしいが……。

俺達の思惑を微塵も気づかないまま、桜真は声を張り上げて言う。「下らないとはなんだ！ 男が大きく成長するには強大な敵が必要なんだよ！ 漫画しかり、ゲームしかり」

桜真の発言を聞いて俺はがっくりと肩を落とす。はぁ……そういう事か。その発想の出所に想像がついて、悲しくて泣けてくる……。元々低かったテンションが更に下がったよ。桜真の考えは解っていたが、念の為、外れていてほしいという願望の元に尋ねる。

「つまりなんだ、お前が感銘を受けた漫画だかゲームの主人公のように格好良くなりたいたいという訳か」

「そういう訳だ！」  
「撤回」

俺は鞆を引つ掴み、教室から出ようと出入口口に向かう。俺に続いて雛と葵も鞆を持ち、躊躇なく帰る準備をする。

「ちょ、まてまて」

桜真が慌てた様子で俺の行く手に立ちはだかった。本気で帰らせてほしい。

「お前、もしかして本当にその話をするつもりか？」

「いいじゃないじゃない、こういう話をしてさ。たまに童心に戻った方がいいんだって。そういう風にしないとバランス取れなくて将来絶対苦労する。僕の経験上それは確実だから今は僕の話の聞こう」

「いつまで経っても子供のままのお前が何を言う。それと桜真と俺は同じ歳だと思ってただんだけど、違うのか？」

「いや、同じ歳ですけど、僕の方が誕生日先ですよ。1ヶ月。だから僕の方が大人です。だから、言葉の信憑性は相当なもんですよ」  
何故いきなりなんちゃって敬語？ てか、たったの一カ月でそこ

までの差が出来るなら、この世に子供なんていないだろ。

もうこれ以上は何を言っても、うだうだと話が続いてウザそうなので反発するのは諦めてさっさと話を終わらせる方向で行く事にする。何より鬱陶しい。

俺は雛と葵にアイコンタクトをし、二人が覚悟を決めた顔をしたのを確認すると、近くの席に適当に腰を下ろす。続いて雛と葵が俺の両隣の席に腰を下ろすのを確認してから一呼吸おいて桜真に尋ねる。

「で？ まず、どうしてそんなアホな事を言い出したのか、話を聞こうか」

「ア、アホ……。いや、よく聞いてくれた！ 始まりは昨日、押し入れにしまつてあつた漫画を久しぶりに読み直した事なんだけどさ」

出だしが想像通りで更にテンションを下がるのを感じたが、ここで気力をごっそり持っていかれるわけにはいかない。すんでのところで雛を見て、かろうじて気力の減少を抑えつつ話を聞いてみると、その漫画というのはこういう内容らしい。

世界で唯一、主人公だけが使えるアイテム。それを使う事の出来る主人公は世界に蔓延る悪の勢力を潰す為の旅に出る。旅の途中に出会った仲間たちと共に次々と現れる強敵を倒していき、最後には世界が平和になる。魔法があつたり熱い展開があつたりとまさしく少年漫画の王道といった内容だつた。

一しきり熱く話し終えたところで桜真が生き生きとした顔で俺達に語り掛ける。

「な！ 燃える展開だろ！ やっぱり男はこうでなきゃいけないと思えて来るだろ？」

「同意を求められても知らねーよ」

「私もよく分からないかな」

「わかるうとする気も起きない」



雖も葵も俺と同様に冷たく言い捨てる。女の子には桜真の気持ちは普通以上にわからないのかもしれない。俺は分かると言えば分かるが、桜真ほど思い入れが湧かない。

桜真は、俺達の反応を不思議そうに見ると呟く。

「あれ」。僕の友達なら何も言わずに賛同してもらえと思ったのに」

「それは無理な話だな」

「私はノーコメントと言う事で・・・」

「桜真なんて死ねばいいのに」

皆それぞれの否定を口にする。葵のは、なんかもう酷いとかそういうレベルじゃなかった。当然その言葉に桜真はつつかかる。

「何でそんな事言われてんの!? 僕ってそこまで嫌われてる!?!」

葵は桜真のテンションに表情も変えずに冷静な声色で言う。

「大丈夫。私は勇斗以外の男はみんな死ねばいいと思ってるから。

その中でも桜真は筆頭」

「どこが大丈夫!? 大丈夫な理由が一つも見つからないよ! 僕、葵とそこそこな月日付きあってきたけど、未だにそういう評価なの!?」

「ちよつと、私の名前呼ばないで。私という存在の価値が下がる」

「名前呼ばれただけでどこまでの嫌悪感を抱かれてんの、僕!」

「私が思うに桜真は、なんかすごい事に巻き込まれて死ねばいいと思う」

「よく分からないけど、めっちゃめっちゃ僕の事憎んでるよね!」

「ちっ」

「何で舌うち!? 話するのもめんどくさいの!?!」

なんだか、桜真が一方的に葵に罵倒されていた。桜真はすでに涙目だ。

ここまで何も言わずに傍観しておいて今さら遅いかもしれないが、さすがに可哀想に思った俺はセコンド判断でタオルを投げ込むように間に入る。

「まあまあ、その辺にしようか。葵も桜真ももう十分楽しんだら？」

「えっ！？ 今の会話の中に楽しみ要素が少しでもあったと思ってるの？」

至極驚いたような顔をする桜真に俺は言葉を続ける。

「それはお前の修行が足りないからだな。もっと精進しろ」

「はい・・・、って何で僕が怒られてんの？ ていうか何で僕には慰めの言葉を掛けてくれる人がいないの？」

「そういう星の下に生まれてきたんだろうなあ・・・悲しい事に。頑張れよ」

「僕、どうしようもなく不幸ですね！」

俺は桜真を信じている。今はこんなに駄目な人間でもいつかはきっと偉大な人間になれると。そう。工場長クラスには。

桜真が楽しくなかったらしいので改めて葵にも聞いてみる。

「葵は楽しかったよな」

「うん。さすが私の玩具だと思う」

「すでに友達の括りですらなかった　　！！」

桜真が絶叫していた。うるさい。

葵はその様子を見て、無表情のまま桜真に言葉という名の凶器をぶつける。

「桜真と書いて玩具」

「泣いていいですか！？」

「ごめん。冗談」

「だよね！ 良かった、僕本当に・・・」

「本当は桜真と書いてゴミ」

「・・・しくしく」

ついに桜真が本当に泣き始めてしまった。葵は人を傷つけるのがうまいなあ・・・。全然褒められた才能ではないですが。そして、葵。こつち見て嬉しそうにニヤニヤすんな。パツと見は無表情にしか見えないが、絶対あれ笑ってるな。

「そんなに落ち込まないで。桜真君はちゃんと人間だよ。玩具、ましてやゴミなんかであるわけが無いよ。ね？」

俺が葵に恐怖を感じていると、気遣った雛が桜真に優しく語りかけていた。きつと、延々と弄られ続ける桜真を見ていて不憫に思ったのだろう。本当に優しい子である。天使つてのがいるならきつとこの子のようなを言うんだらうな。

「ひ、雛ちゃ〜ん！」

あれだけボロクソ言われた後だ。今の桜真には雛が天使どころか女神にも見えているのかもしれない。

すっかり傷心した桜真が雛を抱きしめる。雛も小さい体で桜真を精いっぱい抱きしめ返す。雛、お前つてやつは……。俺はその様子を見て暖かい気持ちに浸りながら一旦目を閉じ、心の中で桜真に語りかける。

(桜真、よかつたな、救いの手を伸ばされて。でも、桜真。残念な事に真の地獄はその先にあるんだぞ)

俺はゆっくりと目を開く。そこには雛に力強く抱きしめ……。いや、締めつけられ、背骨が逆方向に曲がっている桜真の変わり果てた姿が映っていた。俺は、南無とだけ呟き目を背ける。

「ががががが」

桜真から発せされる何かが壊れた音。慰める事に集中していて異常事態に気が付いていない様子の雛に俺は声をかける。

「雛〜、そろそろ雛そうな。桜真の身体が気持ち悪い事になってるから」

「え？ キャー！」

背骨をありえない方向にまげた桜真の身体を見た雛が絶叫する。

桜真については泡を吹いて失神中。ホント……。雛はなあ……。。

「それ相変わらずだな」

「うーん。気をつけてはいるんだけどなあ」

申し訳なさそうにしている雛を見つつ俺は思う。どういっわけか雛は力が異常なほどに強い。小さな体のどこにこんな力があるの

かと不思議でしようがないが、おそらく熊相手に素手で勝てるくらい  
の肉体能力を持っているのではないか。思い返せば俺もあつた  
ばかりの頃は痛い目にあつた……。無意識に身体が震える。

にしても桜真も不憫だ。せつかく救いの手を掴んだのにその手に  
より更に苦しみを受けるなんて。とはいえ、雛には全く悪意はない  
のだが。

「また気絶してるし、次回もこんな事になれば同じ末路を辿りそう  
だな」

「そうだね……。またこんな事になる前に教えた方がよくないか  
な、桜真君に」

「それは駄目だ。教えない方が面白い。どうせ近々知る事になるし  
な」

「雛、勇斗君は本当に桜真君の友達なのか分からなくなる事がある  
よ……」

今までも十数回と同様の場面があつた。桜真はその度に気絶し、  
その度に前後の記憶を失うおかげで未だ桜真の苦しみは継続中。忘  
れるって本当に幸せな事だよな（笑）

「にしても困つたな」

「どうしたの？」

「いや、話の途中だったのに桜真が寝てしまったからな」

「別に寝ているわけじゃないんだけど……。確かにそうだね。どう  
しよう……」

「面倒だからこのまま帰りたいたい」

困っていた俺達をしり目に葵がそれはそれは末恐ろしく信じられ  
ない一言を発していた。そして、それと同時に俺達は感じていた。

「素晴らしい提案だな！ よし帰るか！」

俺達は一斉に席を立つ。よし、これで下らない話をせずつ……。。

「よし、蛇足しちゃったけど、そろそろ話を進めようか」

「……なん……。だと……」

いつの間にか気絶していたはずの桜真が目を覚まして、教卓の前

に立っていた。こいつ、何度かの経験によりちよつとした超人と化しているのか・・・？ 背骨がおかしな方向に曲がっていたはずなのにすっかりと治ってしまっている。俺達は畏怖の目で桜真を見つめた。

「ん？ 何。僕の顔に何かついてる？」

「ああ、多分なんか憑い・・・いや、何でもない」

「憑い？ 何、怖いんだけど！？」

「気にすんな。だって桜真だぜ？」

「ああ、そうだよ。僕だもんね！ いやいやいや、それで納得しろってか！」

「とにかく気にするなよ」

「ああ、うん・・・」

桜真はまだ不満そうにしているが、忘れるように首を振るとそのまま話を始めた。

「で、まず敵だけどさ。誰かいないかな。ちよつどいいの」

話し始めた桜真に今度こそ覚悟を決めつつ、俺達も仕方なく席に戻りながら葵が尋ねる。

「ちよつどいいのって？」

「今の僕でも倒せるレベルの敵」

「お前さつき、燃える展開がどうか言っただけ？」

「そうなんだけどさ、レベル上げとか成長とかコツコツ何かをしていくのが面倒じゃん」

例に出していた漫画の内容を全否定か。こいつは何様なんだろう。

おそらく森羅万象なめている。雖も葵も背中から何か黒いものが漏れ出してきた。覚悟を決めた分、感じることも多いのだろう。

「私、もう帰っていい？」

「ええ！ なんで！？」

心底不思議そうな顔をして驚いている桜真にしょうがなく俺が言っただけ。

「お前なあ、そう言う漫画だゲームだって言ったら、強敵に戦う

前に修行とか特訓するのが当たり前だろ？ そうして敵を倒すから格好いいんだろ？ そんな事もしないで格好よくなりたいてっふざけてるのか？ いや、もう存在すらふざけてるからな、お前は面倒だわ。全部面倒だわ」

「僕、そんな悪い事言ってる！？ そんな悪いかなあ！」

桜真は全然分かっていないらしい。ホント駄目だ、こいつ。少しは真面目に話をしようと思っていたが、もう適当に喋る事にする。

「もういいわ、お前の強敵、竜王で」

「サラッとガチで強敵を出された！？」

「何？ 文句あるの？」

なるべく冷たく見えるように気持ちを込めて冷えた視線を桜真に送る。

「いや、たしかに強敵だけど。というか強敵の括りから大きく上回ってるから。死そのものになってるから」

「じゃあ、神でいいよ。チェンソーで攻撃して、『神はバラバラになった』とかなって、次はお前が新世界の神になればいいよ」

「色々と無理がある！」

「じゃあスライムな。お前にはそれがお似合いだ」

「急に雑魚！ そして凄く蔑まれてる！」

「ええ！？ だってお前、村人にも劣る究極雑魚キャラだろ？」

「何その大袈裟な驚き！ ていうか、そんな人に竜王や神と戦わせようとしてたの！？」

「桜真が十人でやつとスライムを一匹倒せるくらいの能力な」

「弱っ！ 僕弱っ！」

「ちなみに桜真のレベルはすでに最大。もう救いようがない・・・」  
「本当に救いようがないね！」

「もう無理だ。桜真が弱すぎて、俺にお前の敵は探せねえ・・・」  
「何で僕が悪いみたいになってるの？ 僕が弱い設定にしたのは勇斗だよな？」

ふう。本当に桜真は最悪だな。

桜真は、俺が当てにならないのを悟ったのか、次に雛の方を向いて意見を求めた。

「雛ちゃんは？ 僕の敵って誰だと思っ？」

可愛らしく「うーん」と唸る雛を見て少し和む。可愛いなあ、雛は。俺が父親なら絶対に嫁にやらないね。

そんな事を考えていると、ついに雛が口を開いた。

「国・・・とか？」

「対象が強すぎる！ 僕は革命家かなにか！？」

「じゃあ、世界とか」

「何でスケールアップしたの！？ もはや一人ではどうしようもないレベルだよ！」

「前に『いつか宇宙を我が物にしてやる、がっはっは』って言うてなかった？ だからまず国とか世界だと思っただけだ」

「言っただ覚えないよ！ そんな中二病患者みたいな事言っただ事ないよ」

「あれ〜。じゃあ、『くっ、右腕に封印された悪魔が疼く！』って言うのは？」

「知らないよ！」

「じゃあもうわからないよ・・・」

「雛ちゃんの中で僕がどんなキャラになっているのかの方がわからないよ・・・」

もしかしたら一番当てにしていたかもしれない雛から真っ当な答えが返ってこない事に落胆した様子の桜真は次に葵を見ると、もはや投げやり気味に呟いた。

「じゃあ、葵は・・・いいや」

葵は投げやり気味なのに聞くのを躊躇われていた。気持ちにはわかる。葵は確実に当てにならない。真面目に話をしたいのなら俺だって葵に話を振らない。

しかし、そんな桜真の態度が気に食わなかった葵が低い声で言う。「私にも聞かないと桜真を死ぬよりも酷い目にあわせる」

「ひいつ！」

「ここで私の確な答えを出せば、勇斗の好感度がうなぎのぼり」「自分の為にですか！」

「私が桜真の為に何かするなんて有りえない」

「本当に僕の事なんてどうでもいいんですね！？ もういいよ・・・じゃあ期待はしてないけどアイデア出してよ」

葵は少しだけ腕を組んで考えると言った。

「クリップ」

「ないわっ！ 人間相手にクリップとかないわ！」

「クリップと対峙する桜真・・・。何か熱い展開を想像させる」

「僕にはシユールな光景しか想像できないけどねっ！」

「桜真がクリップを曲げようとしながら、『どうだ！ 降参かつ！ 降参しないとグネグネに曲げてしまっぞ！』という凄く白熱したバトルを展開する」

「僕は意味不明な妄想に憑りつかれた小学生か！ それ、ただの痛い人だよね！」

「不満？」

「そりゃあねえ！」

葵がまた腕を組んで考えるそぶりを見せる。

「じゃあ洗濯バサミ。桜真が洗濯バサミに頬を挟まれて、『すみません。もうしませんから許してください！』と泣いて謝る光景が想像できる。熱い展開」

「熱くないよ！ すごく情けない男の姿しか想像できないよ！ てか、それなんかの罰を与えられてるだけだよね！」

「不満？」

「言うまでもなくねえ！」

「じゃあ、ボールペン」

「そろそろ雑貨から離れてくれないかなあ！」

「じゃあ・・・思いつかない」

「ホント、僕どうしようもないねっ！」



桜真がそう言ったのを聞いて、俺、雛、葵はお互いの顔を見合わせた後、親が子供を見守るような優しい目で桜真に告げる。

「……ほんと、どうしようもないね」「」

「あれ？何か目から汗が出てきたよ……」

それだけ呟くと、桜真が教室の隅に座り込み、少しするとシクシクという鳴き声が聞こえてきた。

ここまで畳み掛けるように弄ってきたが、さすがに可哀想に感じた俺達は最後にもう一度考えてみる事にした。何よりこんなアホな話に費やした時間ももつたいたい。せめて何か答えを出さなければ。

深く深く、今までにないくらい真剣に考える。桜真の強敵……それは誰か。敵といえば、やはり強くなけてはいけない。それこそ死ぬほどの努力をして勝てるくらいの。だからと言って空想のものや関係ないものを言っても仕方ない。だとすれば身近なものから考える必要があるな。

学生として身近といえば……やはり学校？学校と言えば、勉強とか友達とか部活だろ。

でも、勉強と部活は敵としてはおかしいし、桜真の友人も俺の知る限りではそういう関係の奴はいない。厳密に言えば葵がそうかもしれないが、まあ今回は外しておこう。

じゃあ他にもっと身近なものはないか？学校よりも身近にあるもの。家、家族……ん？家族？

……

はっ！俺は重大な事を気付いてしまった。ふと、雛と葵を見ると同じ事に思い至ったらしく俺と同じような表情で桜真を見ている。まさか、こんなに近くにいたとはな……。

ガラガラッ！

派手な音と共に教室のドアが勢い良く開かれる。その先に立っていたのは、ワナワナと肩を振るわせる一人の女子生徒。

「家に誰もいないからもしかしてと思っただけ来てみれば……桜真！

こんなところで何してるのよ！」

「げっ！ 姉さん！」

桜真の顔からサツと血の気が引いていく。そこにいたのは、不気味に微笑んだ表情をした桜真の姉、叶さんだった。何だ。この笑っているはずなのに放たれているプレッシャーは。

「あんだ、今日家事当番よね？ 何でこんな時間にここにいるのかなあ」

「いやあ・・・あははは。ちょっと有意義な話し合いをしたくて皆と話してただ」

桜真は声を震わせつつ、『な、な』と俺達の方を見て、同意を誘ってくるが、俺達は視線をそらす。そんな様子の桜真を叶さんが見て言葉を告げる。

「ちょっと私の目を見て話しなさいよ。見たら殺すわよ」

「見てほしいのか、見ないのでほしいのかわからないんだけど！ てか、それは僕を殺したいって宣言してるの！？」

「もう、ウダウダ言っでないで帰るわよ！ いつもより遅れた分、馬車馬のように働いてもらうんだからね！」

そう言くと、叶さんはつかつかと桜真に歩み寄り、問答無用というようにむんずと首根っこを掴む。

それから俺達の方に振り向くと、さっきまでのプレッシャーはどこにいったのか満面の笑みで「それじゃ、勇斗、雛、葵、またね」とだけ言くと、そのまま顔が青ざめた桜真を引きずりながら教室を出て廊下の先へ消えていった。廊下の先からは桜真の叫び声だけが木霊していた。

「・・・すぐ傍にいたよ、強敵。ていうか、ラスボス」

桜真の無事を祈りつつ、無駄な時間を過ごした事を痛感した俺達なのだった。

## 1話 敵（後書き）

初投稿作品『私生活レポート』を最後まで読んで下さり、ありがとうございます。

どうだったでしょうか？ 楽しく読んでいただけたでしょうか？ テンポよく読んでいける事を重点において書いたのでその通りに読んでいただけていればと思います。

ちなみに、この話はシリーズとして考えております。そして、桜真が主人公みたいになっているかもしれませんが、主人公は勇斗です（笑）

（ 作者的に4コマ小説の様なものと考えているので内容がどうなるかわかりません）  
今はまだ文章力も無く、至らない点が多いとは思いますが、今後、自分の考えたキャラクターが生き生きと動く様子を伝える事が出来るように頑張ります。

細々と続きを書き上げていくので、次の話も読んでいただければ幸いです。

最後にもう一度、『私生活レポート』を読んでいただきありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0154t/>

---

私生活レポート

2011年5月18日21時55分発行